

幼児の言語習得と家庭環境

文学

49 (10)

114-122
1981
岩波書店

大久保 愛

1 就学前幼児の二例

数年前、お母さん方に、幼稚園、保育園の5歳児クラスに通うわが子の一日のことはその他を、約12時間ほど収録してもらったことがある。8人というわずかな人数であったが、そのうち一番言葉の多い女児と、一番少ない女児を最初の研究対象として分析し、発表した(1)。なぜ、このような差が出てくるかに興味を持ったからである。この二例から、原因がわかるとは見えなかったが、家庭環境とことばについて教えられるところがあった。人間はことばを使ってしか自分の考えを表出できないとすれば、ことばを、場面にふさわしく使用することが、社会生活をする上で求められる。それは家庭で、幼児期に学ぶのである。

A児、B児(仮名)として、まず、調査結果をあげる。A児の全使用語(助詞・助動詞を除く)数は、一三・七三語、B児は、四・七四三語で、語の異なりは、A児二二〇四語、B児九四〇語で、二人が共通に使用した語は、異なり四六五語であった。この共通使用語

で、A児は21%、B児は50%をまかなっていて、A児は異なった語をB児より多く使用しているのである。また、この共通使用語を何回も使って、A児は70%、B児は80%もまかなっていることがわかった。共通使用語は基本的な語といえる語群なのである。次に品詞別で二児の違いを見ると、A児は、名詞、音まね語(擬音語、副詞、接統詞)をB児より多く用い、B児は、名詞と音まね語が少なく、代名詞、感動詞、数詞をたびたび用いているのである。これだけから、A児の話しことばの文には長いのもあって、楽しいのではないかと、B児のそれは、単純で、代名詞が多いのではないかと推測されるのである。次に、A児のみ、B児のみ使用の語を少しあげてみよう。

A児——名詞には、漢語複合名詞等による文章語や本人による創作語が見られる。

「アンバイ」「イドウ(移動)」「コンヂェウ」「セツケイス」「セツメイ」「ハレツ」とか、「カナシミ」「タノシミ」「ツカレ」「トドメ(止)」「スミカ」「マキ(巻)」「ワク(縛)」などは文章語、「アルキョ

ウス」「イキミチ」「ウシギニウニユウ」「チエウチエウゴッコ」「ヤククハズレ」などは創作語である。

副詞も同じく、文章語をよく使い、擬音語も見られる。「イカガ」「イチオウ」「イマニ」「シヨウシヨウ」「ダイタイ」「タダ」「タマニ」「トリアエズ」「ナルホド」「ヒトマズ」「マサカ」「マルデ」などは文章語。擬音語としては、擬態語も見られる。「サット」「ジロツト」「ヒョイト」「ウロウロ」「ゾロゾロ」「ムズムズ」。

B児のみの使用語は、「イリグチ」「イレカタ」「エガオ」「コウタイ」「シツカク」「ジョウガイ」「ハイケン」などと漢語等による複合名詞も見られるが、「オタンチン」「ブツケッコ」などの俗語もある。副詞では、「オモイキリ」「ゲンキョク」「ジキニ」「ズイブン」「コナゴナ」「サツサト」「ボロボロ」などで語の種類は少ない。(これらの語を、二児が全く使わないというものではなく、この調査ではこのようだったというに過ぎないが、違いの例としてあげておいた)

2 二児のことば環境

この調査は家庭環境調査ではないが、一日の家庭でのことばの生活があまらず録音されているので、家庭環境の一部である親の、子どもとの相互交渉が推察されるのである。これから述べることは、収録された記録を通してのわたしの推測である。

親に録音を依頼するとともに、わたし自身も、子どもを知りたいので面接して、家庭の人員構成、家での遊び、読書やテレビ、友だち関係などについて問答したものを収録した。その中から例をあげる。

A児の場合——お母さんがお話をしてくれたり、絵本などを読んでくれるかという質問に対して、「アル」と言っ71文節の話をしてくれた。半分ほどあげると次のようである。

ハジメネ ウラシマタロウチ イウ オトノコガネ オト
コノコジヤ ナイ オトウサンノ ヒトガ スンデ イタノ。
ソレダネ イツモ ナンカネ フネニ ノツテ サカナ ツカ
マエタリ シテルノネ。ソレダ アルヒ カメガネ リニウグ
ウジヨウチ エウ トコロカラネ ヤツテキテネ モシモシ
ウラシマサン リニウグウジヨウヘ ユキマセンカツテ ユツ
チネ イツシヨニ イクツテ ユツテネ オトヒメサマト イ
ツシヨニ タノシク ゴチソウ シタリ シテネ サンジユウ
ネンカングライ ソロデ アソンデカラ マタ カエツテキテ
ソイデ チイサナ ツツララ モラツタン。(隆)

それからまた、「アト トケイノ コト ユイタインダナ」ということなので話を聞いた。

アノネ ハジメノウチ オコラレテバツカシイタケドネウ
ント イチハゴフロントカ イワレテルケド オボエタノ。ゴ、
ジュウ、ジュウゴ、ニジュウ、ニジュウゴ、サンジュウ、サン
ジュウゴ、ヨンジュウ、ヨンジュウゴ、ゴジュウ、ゴジュウゴ、
ロクジュウ。

これは「オカアサン」から教わったそう、今なんじかとのその場でのわたしの質問に対して、壁にかかっている時計をみながら「イマハネ ヨジネ ジュウブン」と正しく答えた。

B児の場合——テレビの題名をあげ、「ヨクミテル」というので内容を聞こうとしたが「ワカンナイ」という。ついで親が本を読ん

でくれるかと聞いたら「オウチデ ヒトリデ ゴホン ヨンデ ミ
テル」と言う。「ミニクイアヒルノコ」だと言う。

ミニクイノ タマゴ ウンデネ ヤント ワレタカラネ
ソシタラネ ミニクイアヒルノコガ デテキテネ ソシテネ
ウチノゴジヤ ナイチエリカラネ カワニネ オボレサシチヤ
ツテネ オヨゲタカラ ウチノコニ シタノ。

よく知っているねとほめると、「ムズカシイノモアルケドネ」と
言い、「Bちゃん ホントハ カンジ シッテンダケドナ」と言
い、「ジヤ ナマエ カイテ アゲヨウカ」と言っ、ひらがなで
姓名を書いてくれた。小学校に通っている兄がいるので「カンジ」
ということばが出たようだが、どうもひらがな文字のことらしくな
った。就学前になると、文字や数を教えることが、現代の幼児には要求
されていることが窺えるのである。

わたしは、幼児期での文字教育の位置づけを次のように考えてい
る。家庭に小学校に通う兄や姉がいて、机に向って文字を書くとい
う雰囲気があると、弟妹は3、4歳のころから真似て書きはじめ、
第一子より文字を覚えるのが早いようである。もちろん読みもはじ
まっている。第一子は、そう簡単にかかない場合もあるようだが、
子どもの文字を知りたいという好奇心を大切に、自覚性を導き
たいと思う。その時を文字を教えるきっかけにするのは望ましいこ
とである。しかし、文字を知るといことは、五十音の文字の読み
書きができるだけのことではないのである。書かれている内容の理
解、書く中味を持っていなければならない。文字の読み書きができ
るためには、字を知らねばならないのはもちろんであるが、ある程
度の語を蓄積して、適切な語順で表現できることや、それぞれの語

を明確に発音することもできなければならないのである。もの名
前を知り、適切に表現するためには、豊かな経験からことばの意味
を知らなければならない。これらの経験を得るためには、間接経験
である読書やテレビも有効であるが、幼児の場合は、親との対話に
よって得られる耳学問が大きい。親と子でごっこ遊びをするとか、
読書やテレビにも親が介在することによって、子どもの経験が豊か
になるのである。文字を書くことを強制するよりも、親子が同じ経
験(ともに買い物する、散歩に出かけるでもよいし、他人との対応
でもよい)をしたときの親の対応の仕方、ことばづかいを子どもは
学ぶのである。四六時中母子がともに生活することによって、こと
ばの外延や内包を学習するのである。ここで学んだ経験が、文字を
覚えたあとで、読み書く時に、まわり道のようにも効果を発揮する
のである。それなしに文字を覚えても、形だけで内容が乏しいとい
うことになる。話しことば能力は、幼児期にその基礎が家庭で作ら
れるのだから、一生、肉体の一部となって人格を形成することは
先生となる親、特に母親のことばづかいとか、ことばの環境づくり
が大切になる。文字の読み書きのみが先行する現代の幼児言語の教
育を嘆きたいのである。

A児は、後に例をあげるが、母にさそわれて、起床後、アパート
の縁から見る「窓」を話題にしたり、母に聞かれて自分の創作話を
したり、弟や友だちとお医者さんごっこで遊んだり、人形や粘土を
使ってひとり遊びに興じている。それに対して、B児は、小学生の
兄がおしゃべりのせいか、家庭では無口で、会話は、翌日必要な、
園に持っていく品物や服装について語るというふうで、母親からも、
野球ゲームやトランプをしようという語りかけはあっても、「Bち

ゃんの作ったお話を聞かせて」というさそいは全くないのである。

A児の母親のことば——A児が起き出した時、
お外 ^①ミラレナイヨ ^②なんだと思う? ^③キリ ^④あら知って
るの? ^⑤イチゴウトウトカネ トオイ トコロハ アンマリ ミ
エナイ。キリネ、ワー! キリナンテ ハジメテ。

一日がこのようにしてはじまっている。

^⑥ネ キリ ナオツテキタデシヨ ^⑦うん晴れてきたわね ^⑧キ
ット モウ ドンドン。ヨカッタ。ドウシテ キリノトキハ ジド
ウシヤモ ミンナ ビシヨヌレナ? ホラアソコ ミンナ ヌレ
テル。^⑨雨降ったんじやない、昨日。

次は夕食のとき、父親が参加。

^⑩オトウサン キリガサ ウント ヤツタツテコト ワカル?
キリ ^⑪きり? ^⑫ウン キョウ ヤツタノネ ^⑬やったとは言わ
ない。霧がかかったの ^⑭朝行く時? ^⑮ウン ワタシガ オキ
ス、^⑯朝起きた時ね ^⑰ウン ^⑱ふうん 見えなかったの? ^⑲ウ
ン ハチゴウトウハネ ^⑳ふうん ^㉑ヨウゴウトウハ ミエタケド

^㉒きりっていうんじやなくてきり。 ^㉓キリ ^㉔うん

話題が知的であり、窓のアクセントのまちがいの訂正も行なわれ
ている。

B児の母親のことば——B児が無口のせいもあって、母親による
日常生活のごとが多い。

- ・お豆腐食べなさい。これお豆腐。また! 明日のお弁当作らないわよ
 - ・だからお母さんに貸しなさいって言ったでしょ
 - ・またはじまったあ、どうしてこんなことやるの! ちゃんとおしなさい!
 - ・ほーら あけたらあけっぱなし、どうして閉めることがわからな
いの?
 - ・そんなこと置いておくからいけないんじゃない
- 傍線のような命令やごごと、言わでものことばが多い。もっと楽
しい子どもとの話題がないものかと思わせる。
この二児のもう一つの違いは、A児にはいわゆる「幼稚園こと

ゲーテ・シルバ―著／前原 寿訳

ペスタロッチ

—人間と事業—

A5判上製函入・四〇〇頁 定価三九〇〇円

ペスタロッチの生涯は、愛と真実に生きた一
人の人間の魅力溢れるドラマである。ペスタロ
ッチの全体的な人間像と、政治・経済・宗教道
徳・教育等の多方面に亘る彼の思索および実践
の全貌を、多くの新資料を含む原典の追究に基
づいて再現する。今日の混迷した教育状況の打
開に本書は多くの示唆をあたえるであろう。



岩波書店
東京・千代田一ツ橋2-5-5

ば」が見られたのである。

オギエウニエウ、オセナカ、オハジマリ、オゲッシャ

幼稚園で先生がていねい語を使おうとして「お」の過度につくことばを使うために、子どもも使うようになった語である。一方B見は、友だちに男児が多いせいか、あるいは環境のせいか次のようなことばが見られた。

ザアマミロ、スゲエ、チキシヨウ、という乱暴なことばや、「これ」を「コイデ」、「すみません」を「スイマセン」、「ぜんいん」を「ゼイン」と傍点のようになまって言う言い方である。

映画「マイ・フェア・レディ」の花売娘イライザもこんなことばを使っていて、ヒギンス先生になおされレディになっていく、イギリスでのお話であるが原作はバーナード・ショウの「ピグマリオン」、東京にも存在していることを知ることができたのである。しかし、これらは、小学校に入学し、文字ことばを学ぶことによつて、次第に訂正されていくので、わたしはそう重要な問題と思つてはいないが、幼児期にある例として述べた。

以上述べてきたところは、幼児期の到達点である小学校入学前の幼児のことばが、家庭でのことば環境によつて差が出てくる二例である。ここから言える指導のしかたを次に五つほどあげる。

- ①両親に話しことばを大切にする意識が必要であること
- ②家庭での会話を大切にし、要求や命令語の多い日常生活語ばかりでなく、自然、社会、精神、等の文化的話題を会話のテーマに持つようにすること
- ③「語文や代名詞のみで話さないで、「だれが」「なにを」「どこで」「いつ」「どんなふうに」「する」と、文として話すように心が

ける。そのためには、適切なことばや修飾語を用いるようにすること

- ④あかるいはっきりした発音を心がけること
- ⑤ゆたかな話題が話せるためには、読書も大事だし、子どもとともに絵本、童話を読み、同じ経路を持つようにすること

3 幼児初期のことばと母親

幼児期と言っても、これまで述べた小学校入学前のころもあるが、誕生のころの幼児、まさに言語を習得しようとしているころもある。後者の幼児はどのようにしてことばを習得するのであろうか。わたしは、こちらも、録音機を使ってことばを集め、分析している。幼児がことばを習得する順序と年齢について、個人差はあるが大体の標準的なことがわかったのである(2)。

子どもの認知能力の発達と、親との相互交渉によつて、子どもはことばを覚えていくという母子相互関係の視点からのことばの調査は、まだ、日本では少ないようである(3)。わたしは、研究の土台となる生の資料を求めたいと、母親の協力を得て、一男児の1歳前後から4歳までのことばと、それにかかわる母親のことばを同時に録音し、文字化した。一つは、毎月2時間ずつ随時録音するというもの、他は、誕生日当日の一日の録音である。この一日調査のものは、本年6月に刊行された(4)。

これら資料を用いて、幼児がことばを獲得していく上で、母親のことばかけがどんな役目をしているかを調べた。一児の母親の例なので一般化できるかどうかわからないが、分析した結果を述べる。子どもの発達にしたがつて親の対応も変化するのはもちろんで、こ

こにあげるのは1歳から2歳までの期間である。

前言語期から1歳前後にかけての研究は、アメリカでも、母子関係の大切さの認識のもとに心理学者の間で盛んになっているようである(5)。

次に実例をあげながら見ていくことにする。

- ①禁止や命令——「もうさわらないで、そこ熱い熱いよ(トイスター)」「たたみの上に響いちゃいけないのよ」のように行動の禁止や命令が多い。その時、「何を」「どこに」という禁止するものや場所の名前を言うことが大切。ただ「だめ」というだけではことば指導にならない。また、発展して、「ひとつずつ取りなさい」と方法も教えている。
- ②状況説明をする——①の禁止や命令の場合も状況説明をすることが大切だったが、どんな場合もだまって行儀するのではなく、行為とともにことばを使うこと。「お口に持って行ってあげますよ」「これ全部干してからね」「はらパンサーイして、ちゃんどぬげたでしょ」と、理由をあげたり、状況を説明したり、着服の仕方を教えている。

子どもが質問をしているわけでもないのに、子どもの視線がそちらに行くと、「それプーさんね」「はい、ウマンマよ」とことばで命名する。その他、「外で遊んだからのどが乾いたのね」「キリンちゃん(ビニールの玩具)持ってきてくれたの」「ねむくなったのね。プーさん(玩具)と二人でねころんで」「子どもの行動を見守って、ことばで話しかけている。「うるさい」などと言わないのは、育ててほしいという母親の願望の自然のあらわれなのだろう。「鳩のデデッポッポがきこえたでしょ」などとも言う。子どもは、食べものを与えてもくれ、なんでもしてくれる母親のことばに耳を傾け、目で見、頭を働かせることによつて、もの名前や、生活の知恵、きまり、まわりのたがずまいなどを学んでいくのである。

- ③子どものことばに対する応答——子どもの質問や叙述に対して返答する場合も同じである。叙述と言っても1歳ころは、「ンーン」と指さして聞く程度であるが、子どもの身振りで推察して、「これはバス」と直ちに返答する。指さし以外では、ほとんど単語一語の文であるが、その時は前後の文脈を補充したり、まちがいを訂正し

ソシエルの思想

丸山圭三郎著

A 5巻綴入四〇八頁 定価三六〇〇円

20世紀後半の人間諸科学の方法論と認識に多大な影響を与えた近代言語学の父ソシエール。初公開の資料によつて原初の記号理論の思想の本質を明らかにする。ソシエール研究の決定版!

- 増刷 ソシエール一般言語学講義 小林英夫訳……………A 5判 定価二五〇〇円
- ソシエール J・カラール/川本茂雄訳「岩波現代選書12」……………新B 6判 定価二二〇〇円



岩波書店
東京・千代田・一ツ橋2-5-5

て、正しい語、あるいは文にして返答する。

・㊦クック ㊦くっくはいて行きたいの？ 今暑いわよ、こんなかんかん照りで、お日様 ㊦ンンアー ㊦じゃ もうちょっとして行きましよう ㊦ン ㊦涼しくなったら行きましよう。信号見に行きたいんでしよう ㊦ン ㊦信号 背いのと赤いのとあるでしょう ㊦ン ㊦背になつたら進めって言うの。行ってもいいですよ。赤はね止まって下さい、行っちゃだめって言うの。バツバツって、赤いのと背いのがつくでしょう。そしてブーブーがみんな赤いのだと止まるでしょう ㊦ン ㊦んんんん ㊦そうそ止まるの ㊦ン ㊦あとで行きましようね、今はまだ暑いから(1歳4か月)

この子は信号を交差点に見に行くのが好きであったが、それにして母の説明は、傍点の部分は直まね語で子ども向きとはいえ、教訓的でくわしい。

④教示的発言——全部の発言が教訓的であるが、以下の例はことばを教えているもの。傍点の部分。

・㊦バスと電車がつてるの(絵本)を持ってきて。そうそう、おりこうさんね、今度これ見ましよう、バス バス バス ㊦んんんん ㊦バス ㊦バス ㊦バス ㊦ブー。

バスとブーブー(自動車)がまだ分化していないのである。

・㊦あつたは？ ㊦ター ㊦たーじゃない、「あつた」よ ㊦ナーイ(ともに1歳1か月)

発言ができないで「たー」になっている。「あつた」は録音テープの回っている側を見て言い、逆を「ない」と言っていた。コント風のシーンである。

子どもには、獲得した少ないことばを使って似たものを命名する

「借用」という現象がある。男の人を見ると「パパ」と言ったりするものもその例である。その他、同じ場面で使うことばでありながら立ち場によってちがう言い方になる、「ただいま」を「お帰り」の意で用いるなどの使用まちがいは有名である。これらの訂正も母親が行なつて、社会に通用する語を習得させている。母子で絵本を見ながらの会話。

・㊦ワンワン ㊦それワンワンじゃないわよライオンよ。ライオンライオン ㊦ワンワン ㊦ワンワンみたいね ㊦ワン ㊦ワンワンよりもね、もっと大きいの ワンワンよりも大きいのよ 会ったことないからワンワンなのね ㊦ワンワン ㊦ワンワン じゃないのよ(1歳6か月)

このころ、この幼児は熊やリスの絵もワンワンと言っていた。

・㊦うまうまにしますよ ㊦ミー ムウ リ ルー ドウジ ヨ ドウジ ヨ ㊦手でどうぞ？ ㊦ドウジ ヨ ㊦どれにどうぞと言ってるの？ ㊦ドー ドウジ ヨ ㊦ちよつと待ってどうぞ ㊦ドウジ ヨ ㊦どれほしいの？ ㊦ドウジ ヨ ドウジ ヨ ㊦ちよつと待ってね 今ね もうすぐできるのよ ㊦ン ㊦「ちよつと待ってね」「ちよつと待って」って言うのよ、「どうぞ」じゃなくて。はい、どうぞ(1歳6か月)

満2歳ころまで、「ちよつと待って」と言えず、「どうぞ」と言う。母親が食物を与えるときのことばだったので、欲しいときそう言はばよと思つたようである。

⑤疑問文を用いる——以上は内容面に関してであるが、形式的には、繰り返しや疑問文を用いることが多い。疑問文は文末が上昇調なので子どもの注意をひくと同時に、親も、子どもの反応をたしかめる

ことができる効果がある。「これはなんですか」「どうしたの？」「こんど読むの？」「もうねんねするの？」最後の二例は念押しである。次の例など、質問しているわけでもないのに疑問形を用いている。このような上昇調も多いのである。

「そんなはだかんぼでどこ行くの？」「お口をバクバクしているの？」「また、自分で質問して自分で答える自問自答の言い方も使つて、子どもの関心をひくということもしている。「どっちのお手手に入っていますか、ない」「こっちはなんでしょう、か、リスさん」などと使つて楽しんでる。

このように、母親は繰り返しや疑問形を効果的に用いたり、できるだけ大きく口をあけて、発音明晰にわかりやすく話しかけるとともに、内容については、そのことばがあらわす場面(意味)を示しながら、ことばのみでなく行動もまじえて話していることがわかる。ことばを具体物と対応させながら、そのことばの文脈(状況)を示しながら、ことばの社会的用法を教えているのである。こうして、子どもは社会的に通用することばの意味を、ことばの使われる状況

を通して、正しく学んでいくのである。就寝の時、昼に散歩に出かけた時のことを子どもに話すことは、ことばとイメージが一致して、子どものことばを豊かにする一方法なのである。1歳半の子の応答は「ん」に過ぎなくても、すばらしい栄養になっているのである。

・㊦椅子に腰かけていたら猫が来たじゃない、真黒い猫が ㊦ン ㊦ニヤオンて、ニヤオン、ニヤオン ㊦ン ㊦ニヤオンって言ったじゃない ㊦ン ㊦ね ㊦ン ㊦ン(もつと話せの意) ㊦それでバス見たわね ㊦ン ㊦バスも見て、電車も見たじゃない ㊦ン ㊦電車ゴーって言ったじゃない ㊦ン ㊦ン(もつと話せ) ㊦何？ ㊦ン ㊦それからオートバイも見たでしょ ㊦ン ㊦それから八百屋さんもいたじゃない ㊦ン ㊦まいどって八百屋さん ㊦ン ㊦それでドンドンドンドンって帰って来たの ㊦ン ㊦それでただいまって帰って来たの ㊦ン(笑) ㊦ン ㊦ン(もつと話せ) ㊦信号見たでしょ ㊦ン ㊦信号 ㊦ン ㊦信号 ㊦ン ㊦音だったでしょ ㊦ン ㊦もうねむくなつたんでしょ

中川久定著

アイトロの『セネカ』論

「初版と第2版とに表現された著者の意識の経過にかんする考察」

A 5 朝上 監訳入・六九四頁 定価 一三、五〇〇円

アイトロの『文学的遺書』であるセネカ論第二版と初版との異同を克明に分析し、アイトロの思想・生活感性の推移を解き明かす。現世で迫害をうけたソクラテスとセネカに自らを重ねあわせ「後世」への期待を築くにいたるアイトロの姿を浮彫りする斬新な心理分析は、広く思想・文学・歴史研究の方法論に新たな寄与をもたらす。



岩波書店

東京・千代田一ツ橋2-5-5

4 まとめ

幼児期を小学校入学までの時期とすると、約6年間という長い期間である。したがってことは教育も、幼児前期である3、4歳までと、幼児後期の5、6歳の年齢では異なってくる。大ざっぱに言うると、初期は、母国語のうちの日常生活語を習得する期間なので、母親はことばを習得しようとする幼児を助けて、日常生活でのものと対応の中で、縫隙させながらことばの意味を教えようと意図する。後期は、集団生活も始まり、自分のことばで自分の行動の調節もできる(内言)ようになって、社会生活語も増え、大人の使う抽象語も使いたがるようになって、表現しようとする気持が旺盛になる。その時は、母親は聞き上手になって、子どもにことばを使う機会を十分に与えるようにしたい。友だちとのごっこ遊びも会話の好ましい縫隙の一つである。また、よい話を聞く機会を与え、もう大きくなったからと放っておかず、童話などを一緒に読みたい。ことばを正確に用いる注意も適宜与えるようにしたい。また、母子で会話をしたい年ごろなのである。

幼児期の話しことばを聞く、話す、話し合う活動が豊かであればあるほど、小学校に入ってからの文字中心の生活も楽しく、豊かになるのである。決して別のものでなくつながっているのである。幼児期は話しことば教育に力を入れたいと思う。その土合は、家庭なのであるから、家庭環境の一つである母親のことばを磨くことがすなわち、幼児の言語向上にもつながってくるのである。ことばを磨くことは形式を整えるというばかりではなく、全生活を豊かにしなければならぬのだということも忘れないようにしたい。

- (1) 国立国語研究所創立30周年記念研究発表資料・大久保愛「幼児の語彙の発達——二幼児間の語彙の共通性と個性」(昭和53・12・2)
 - (2) 大久保愛『幼児言語の発達』(東京堂出版、昭和42・11)
 - (3) D・スターン、岡村佳子訳『母子関係の出現——誕生から一八〇日——』(サイエンス社、昭和54・5) 言語生活55号 特集「育児とことば」(昭和56・3、筑摩書房) 野村庄吾『乳幼児の世界——こころの発達』(昭和55・12、岩波新書)その他がある。
 - (4) 国立国語研究所・言語教育研究部資料『幼児のことば資料(1)——2歳・3歳誕生日のことばの記録——』『幼児のことば資料(2)——4歳誕生日のことばの記録——』(昭和56・6、秀英出版)
 - (5) Edited by K. Snow & C. Ferguson "Talking to Children — Language Input & Acquisition" (1977, Cambridge Univ. Press) などから窺われる。
 - (6) O・イエスベルセン、三宅鴻訳『言語——その本質 発達、起源——』(昭和56・4、岩波文庫)の第二部「子ども」では外国での般用の例が見られる。
- (おおくぼ あい・国立国語研究所言語教育研究部第一研究室長)

被差別部落の識字運動

——それが提起しているものは何か——

中 村 弘 三

1 わが識字

「識字運動」「識字学校」とよぶ活動なり、そうした教育の場があるのだが、それはいったいどういうものなのか。まず、そこから始めるべきだろう。

ある被差別部落の母親は書いている。「私のなやみは学問とゆうことです」として。

「わたしがさんかんびにいくのに、かみをゆってもらいにいったら、おじいさんが、ねこにやるようなものだとい(つ)たことばが、びねにずしんと。くやし(かつ)た。これがさべつだとおもった。なだが、いっばいながれてとまらなかつたのです」

これは「しき字学校がはじまってから」として。

「いっばいみちなのかな。こんなくらしいことの、くりかえし。しき字学校があるから、私にとってはさきさきにならなから、がんばってやらなくてはとおもい、なやみ学校がはじまってしなければとおもうほど、わからな

くなるのです。こんなくりかえしなのです」

「識字」とは中国のことばであり、字をおぼえるという意味である。ここでその歴史をたどることはできないが、第一次大戦後、ロシア革命の影響をうけた知識人たちが「平民教育講演団」などを組織して文盲大衆の教育にあたる。一九二〇年ころからは陶行知たちによる識字運動がはじまる。抗日戦争の時期になると、子どもが親たちおとなに文字を教える「小先生」運動なども生まれる。それが一九三五年当時、わが国へも『生活学校』や『教育』を通して紹介され、注目されている斎藤欲男「中国・識字運動の歴史」『解放教育』第一三三号、一九七二年)。

この運動は、わが国では忘れられていく。ただ、被差別部落大衆だけは、教育の機会をまったく奪われてきたが、自らの力で解放を勝ちとらなくてはならなかった。本格的な運動は一九二二年の全国水平社創立からはじまるのだが、さいしよはやはり中国と同じ道をたどる。京都・田中の「水平学校」(一九二五年)や、東京水平社の「プロレタリア学校」(一九三〇年)などが開かれて解放理論が学び